

# 豊田市 郷土資料館だより

No.97

## 目次

- 企画展「古い道具と昔の暮らし  
～もつ・かつぐ・はこぶ～」 2
- 民具調査だより 23 車で荷を運ぶ～大八車～  
ペリー来航！ 3  
～その時、この地域の人々は…～ 4
- 飯田街道 初代の矢作川越え 5
- 「旧龍性院庭園」国の名勝指定へ／  
「豊田市藤岡民俗資料館（旧藤岡中学校特別教室棟）」  
国の登録有形文化財（建造物）へ 6
- 新収蔵資料紹介 6 山本梅逸筆 蘭図天袋襖 7
- 江戸時代の城下町・寺部に残る  
武家屋敷の長屋門 8



# 古い道具と昔の暮らし

もつ・かつぐ・はこぶ

●平成 28 年 12 月 17 日 (土)～平成 29 年 3 月 12 日 (日) / 豊田市郷土資料館 第 2 展示室

【休館日】 毎週月曜日 (祝日の場合は開館)・12 月 28 日 (水)～平成 29 年 1 月 4 日 (水) 【観覧料】 無料

豊田市は、中心を矢作川が流れ、山地から平地へと豊かな自然環境が広がっています。その中で、人々によって使われてきた古い道具は、私たちのご先祖さまが、知恵と工夫をつめ込んでつくり、使ってきたものです。

交通機関が発達しておらず、自動車がなかった時代には、働く人々は農作物や日々の燃料であるタキモンなどを人力で運ばなければなりません。その中で、大きな荷物や細かな物、大勢で運ばなければならないような多くの荷物を運ぶにはどのような道具が必要かを考え、工夫をこらしてきました。牛や馬に道具を付けてたくさんの荷物を運ぶ方法、船を使って川を下って運ぶ方法、道路が悪く牛馬が通れないところでは背負子しょいこなどを背負う方法など、その地域の土地の状況や環境によって使う道具や方法を使い分けていました。



荷馬車・人力車などの様子 (足助地区)

(1907) の記載があり、当時実際に使われていた道具がよくわかると同時に、商家の活気が伝わってきます。

今回の展示では、暮らしの中の様々な場面で使われた「もつ・かつぐ・はこぶ」ことに関わる道具などを展示します。道具をとおして、昔の人々の暮らしの一端を感じ、今の暮らしを考えるきっかけとしていただければ幸いです。

(名和奈美)



水筒とメンバ



大八車

期間中の催し物

ギャラリートーク

※申込み不要

平成29年2月26日(日) 午前10時～10時30分



背中当てと背負子

左の背中当ては右の背負子を背負う前に背中に当てるクッションの役割をしています。背負子は、セイタともいい、藁束やタキモンを大量に運ぶことに使われました。

右上の写真は、足助の町並みの中にある商家の様子を撮影したものです。お店の前には、中央に人力車、左側には荷馬車、自転車や大八車などの様々な「はこぶ」道具を見ることができます。写真には明治 40 年



車で荷を運ぶ……

# だい はち ぐるま 大八車



大八車の車台にあった「荷車鑑札」 W112 H67



W1120 Hφ940 D3030 鉄輪幅40 輻16本

大八車という呼称には諸説あり、「大人八人分の働きをするという意味でこの名が付いた」とかで「代八車とも書く」とか「牛にかわって8人で引くから」「長さ八尺(2424 mm)×幅二尺五寸(757 mm)で車輪の直径三尺五寸(1060 mm)の物をこう言った」さらに、『嬉遊笑覧』には「古来車が多かった滋賀県大津の八町の名から生じた」。江戸時代から大八車は用いられていたようで、当時の大きさはというと「車台の長さ一丈(3030 mm)ものを十大、九尺(2727 mm)のものを大九、八尺のものを大八、以下大七、大六とよんだ」などなどがあります。多分、車台の長さから呼ばれたもので、「台八車」と記すのが正しいのではないかと思います。

私たちが日常生活のなかで荷を運ぶ場合、一番手取り早いのは自分の身体を用いて持つ、提げる、担ぐ、背負うなどして移動しますが、人の力には限りがありますから、重いものや嵩のはる荷を前にすると途方にくれます。そんなひ弱な人間の強い味方が車輪です。現代生活の中にあっても、私たちは台車やキャリーバックのお世話になり、車輪のあるおかげで行動範囲を広げることができています。

大八車を一台造るには、大勢の職人さんの技術が必要で、車台を造る車屋(車大工)、鉄輪を造る車鍛冶、

## ●車輪の各部名称



轆を造る挽物師らの技を生かして、ひとつの物に組み上げます。木材もその特性に合わせて選択され、車台は檜、輪型と輻は白樫、轆は樺などで造られます。鉄輪は加熱し膨張させ、輪型に嵌め合わせ、その後急速冷却し収縮させ締める技、「焼き嵌め」で仕上げます。

Wφ975 D160 鉄輪幅45 輻14本

車輪を備えた運搬具を考えた人は素晴らしいと思います。さて、この素晴らしい運搬具である大八車ですが、大八車が実際に活躍していた姿を見た覚えのある人はどのくらいいるのでしょうか？大八車は、江戸時代の初期から江戸の町で使われ、次第に地方に伝播して、さまざまなものの運搬に使われました。大正時代以降は荷馬車や牛車に替われ、さらにその後のトラックの普及で減少したと言われますが、戦中や戦後も各地で使われていましたので、実際に大八車を引いた人、その姿を記憶している人はまだいるのではないかと思います。筆者が克明に記憶している大八車を引く風景はというと、決まって人の横、梶棒の外側にベルトを掛けられた犬がいて、その犬が一生懸命姿勢を低くして足に力を溜め、人と一緒に車を引いている姿。人も腰や肩にベルトを掛けて引いていました。牛馬といわず、犬も当時は力仕事の手伝いをしていました。

車輪を備えた荷車は水平移動にはそれほど神経を使わなくても良いのですが、道路には起伏がありますので坂道を登る大八車の可哀なこと、お手伝いの犬も舌を出しっ放しで喘いでいます。聞くところによれば長い坂道の下で待っていて、荷車が来たら押しして駄賃を受け取る商売があったとか…。また、つらい上り坂だけではなく、下りは下りで大変危険で、急なこう配の場所ではジグザグにゆっくり下りないといけません。大八車はブレーキ装置を備えていませんので、その取り扱いは見た目よりも難しいと言えるでしょう。

タイトル下に載せた写真は荷車に与えられた鑑札。鑑札は今で言う許可証、免許証です。特定の営業や行為に許可を与えたことを証するための証票です。これとは別に、車台の木部に「農業専用」「愛知縣舉母警察署」などの焼印が押された大八車もあります。荷車の鑑札を受けるといことは、車税を課されるということで、明治初期の大阪府でも大きさ、積載量によって大八車に細かな車税を課していたようです。

(東海民具学会 岡本大三郎)

# ペリー来航！ ～ その時、この地域の人々は・・・ ～

嘉永6年(1853)6月、浦賀沖にペリー提督が率いるアメリカ東インド艦隊の黒船4隻が来航しました。江戸幕府を震撼させたのはもちろん、当時の人々にも大きな衝撃を与えました。ペリーは強力な武力を背景に日本との通商を要求し、幕府は翌年ペリーが再度来航した時には横浜に応接所を設け、会談を行っています。

小学校の教科書にも載るこの日本史上の事件は、現在の豊田市域の人々にも影響を与えたことが、いくつもの歴史資料からわかります。

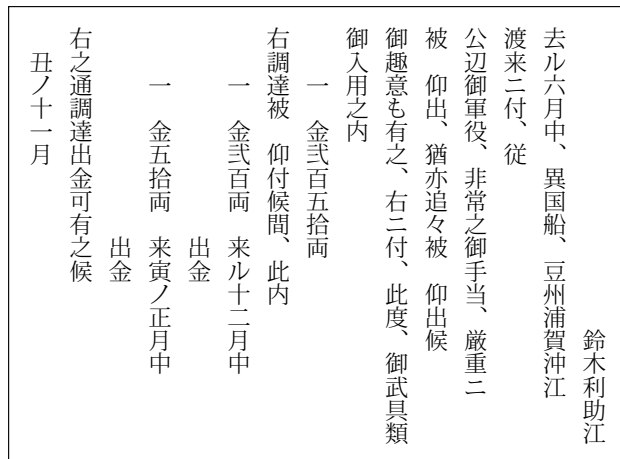
## 軍資金集めに奔走する武士「鈴木利助あて書簡」

この資料は、足助の豪商・紙屋鈴木家の分家にのこされたもので、異国船の浦賀沖渡来により幕府から軍備を厳重にするように求められ、資金の調達を依頼し



たものです。ペリー来航の後、江戸湾は諸藩の大名が持ち場を決められ、それぞれが警護を行う厳戒体制が敷かれています。

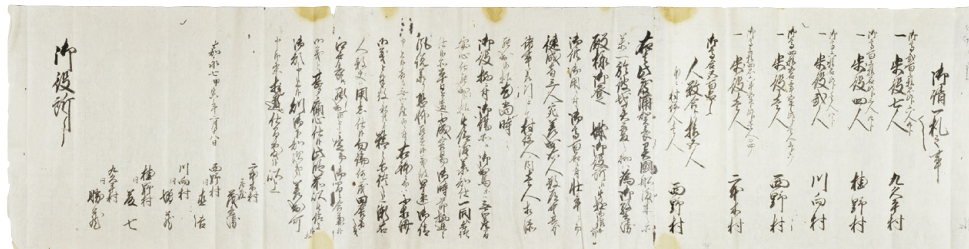
資料にも武具類を調達するための費用とあり、250両もの支出を依頼しています。依頼主は、寺部渡辺家の当主・渡辺半蔵(11代渡辺寧綱)です。寺部渡辺家は尾張藩の重臣で、尾張藩にも警護の命が下されていました。資料の日付は丑年(嘉永6年)11月。ペリーが最初に来航した6月から5か月後、幕府はもとより警護を命じられた大名、その家臣たちも大慌てで軍備増強に奔走している様子がうかがえます。



## 百姓も江戸へ行く！？「御請一札之事」

また、松平地区九久平村に陣屋をおいた旗本の鈴木市兵衛家は江戸城の警護要請を命じられました。鈴木市兵衛家に対し、領内の村々に人員を出すように命じたことがわかる資料があります。これによると各村から石高につき、壮年で健康な者3人ずつが割り当てられたため、九久平村7人、桂野村4人、川向村2人、西野村1人、二本木村1人の計15人と西野村の役人1人が江戸まで行くことになったことがわかります。

ペリー来航は、江戸から遠く離れた三河の地で暮らす百姓たちにも、直接的な影響を及ぼしていたのです。村人たちにとっては、降って湧いた災難。さまざまな風説も伝わり、怖がって誰も行きたがらない。ようやく説得して15人を揃えたと書かれており、当時の状況が推察されます。また村役人たちは「苦心して何とか人数だけは用意したものの、田舎者なので、江戸へ行っても役には立ちません」と書き添え、何とかして役を免れようとしているかのようです。



他にも、風説を書き留めた日記や、ペリー一行に出された料理の献立を書き写した資料などもあり、人々の関心の高さを知ることができます。

遠く離れた地で起きた日本の一大事であるペリー来航。この地域の人々にも大きな影響を与えました。  
(伊藤智子)



# 飯田街道 初代の矢作川越え

飯田街道は名古屋から信州を目指し、途中足助を経由する歴史ある街道です。今は車で平戸橋を渡り、容易に矢作川を横断できますが、初代のルートは船による大河越えでした。そこには先人が遺した知恵と努力の跡、そしてドラマが眠っています。

枝下町の両枝橋すぐ下流右岸の渡船場跡【写真1】からその情景を知ることができます。豊田市域の出土品に、当地にはない信州や伊勢方面の石器があります。これにより、縄文人・弥生人が塩尻・飯田・足助・豊田・名古屋で交易をしていたと推察できます。その道は災害などにより幾度も変遷しますが、現在の飯田街道と思われます。

戦国時代には信州から稲武・足助まで武田信玄が騎馬隊を率いて行き来し、加茂地域は矢作川を境に西は織田信長、東は徳川家康がせめぎ合い、家康の後ろには今川義元が控えていました。まさに名だたる武将が行き交った「戦の道」でした。戦乱が終わった江戸時代には海からの海産物、山からの果実が行き交う「生活の道」として、いつしか「塩の道」と呼ばれるようになりました。

名古屋市平針方面から足助を目指すには、豊田市保見地区を通り、四郷まで来ます。橋のない時代は御船を通り、枝下で矢作川を越えました。ここを渡れば力石峠を越え、足助まで最短ルートだからです。この渡船は享保3年(1718)に村役により行われ、享保5年からは兩岸村民(当時は西枝下村、東枝下村)で運営されるようになりました。今で言う民営化です。これにより定期航路が安定し、人々や物流の往来が容易になり、中馬方式が確立しました。ゆえにここが飯田街道

初代の矢作川越えです。馬がこの地を渡った証として渡船場の手前に水飲み井戸が残っています【写真2】。

馬子(馬で荷物を運ぶことを職業にしている人)は尾張から西枝下村を目指し、渡船前に馬を休憩・水分補給させました。馬子は家族の元を離れ、単身馬とともに幾日もの行程にでます。馬は今で言えば、愛車とペットのような存在で、家族同様に扱っていました。馬が生涯を終えた後は、慈しみ馬頭観音【写真3】に精いっぱい供養しました。

定期航路中、人々を悩ませたのが、豪雨による川の増水です。無理に出航して船が流されたら、荷物はおろか馬子、馬、船頭も命を落としてしまいます。馬子は、激流を前に船に乗るのをたじろぐ馬をなだめながら、塩の到着を待っている信州の村民の顔を浮かべて、必死に船頭に出航を願い出たことでしょうか。ここを越えれば、あとは自力で辿り着けるからです。しかし船頭も人命を第一に考えなければいけません。船頭と馬子の葛藤が想像できます。そして先人は、その問題を「測り石」という岩【写真1】で解決しました。この岩が水面より出ているれば出航し、増水で岩が見えなければ出航しないということにしたのです。これにより安全に川を渡れるようになりました。

その後、明治13年(1880)に、1km下流に大釜橋ができ、飯田街道の矢作川越えは下流に移りました。枝下の渡船はその後、昭和27年(1952)まで234年間も続きました。その間、船の渡航を安定させるために使用したワイヤーロープの台座の一部が残っています。そして馬頭観音は枝下の旧街道沿いの峠にひっそりと佇み、馬子との思い出を歴史に刻んでいます。

(とよた歴史マイスター 田内三男)

【写真1】枝下の渡し場



水面に見える石が測り石

【写真2】渡船場手前の井戸



渡船が終っても潤れない井戸

【写真3】旧街道峠に佇む馬頭観音



馬の魂が安らかに眠っている

## 「旧龍性院庭園」 国の名勝指定へ

国の文化審議会は、文部科学大臣に対し、「旧龍性院庭園」（猿投町）を名勝に指定することを、平成 28 年 11 月 18 日に答申しました。今後、官報告示を経て、県内では 6 件目、豊田市では初の国指定名勝となります。これまでに国指定名勝に指定された愛知県内の庭園としては、名古屋城二之丸庭園（名古屋市・指定年昭和 28 年）以来 2 件目で、63 年ぶりの指定となります。

### ＜「旧龍性院庭園」のご紹介＞



猿投山（標高 629 m）の南麓に位置する、猿投神社の神宮寺の一つであった旧龍性院の庭園です。発掘調査から 17 世紀前半に成立したと考えられます。近世における三河地域の庭園文化の広がりを示し、三河・尾張・美濃に権勢を誇った猿投神社の栄華を知る上で

貴重な庭園です。南北方向に約 43 m、東西方向に約 28 m を測る座観式庭園で、池泉とその三方を囲む築山、庭園の視座となった客殿などにより構成されています。庭園の構成要素は、幕末頃の作と推測される「龍性院家相図」（個人蔵）に描かれた姿と大きな違いはなく、近世庭園の旧態を良好にとどめています。一方、庭園の植栽や観賞の場となった寺院建築物である客殿などは、廃仏毀釈により完全に除却されましたが、建築物の下部遺構は、地表・地中に良好に残存していることが、地形測量調査、試掘調査で確認されました。

※現在、旧龍性院庭園は非公開です。私有地のため、現地への立入はご遠慮下さい。

※今後、保存活用計画を策定し、公開に向けた整備を進めていきます。

## 「豊田市藤岡民俗資料館（旧藤岡中学校特別教室棟）」 国の登録有形文化財（建造物）へ

国の文化審議会は、文部科学大臣に対し、「豊田市藤岡民俗資料館（旧藤岡中学校特別教室棟）」（藤岡飯野町）を、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」（登録基準）として、登録有形文化財（建造物）に登録することを、平成 28 年 11 月 18 日に答申しました。今後、官報告示を経て、豊田市 18 件目の登録有形文化財（建造物）となる予定です。

### ＜「豊田市藤岡民俗資料館（旧藤岡中学校特別教室棟）」のご紹介＞

建物は、木造平屋建、切妻造、棧瓦葺、建築面積 342㎡です。昭和 29（1954）年、愛知県西加茂郡藤岡村立藤岡中学校（現豊田市立藤岡中学校）の特別教室棟（理科室・調理室・裁縫室）として建てられました。当時、西加茂郡内で特別教室棟をもつ学校は稀で村の誇りでした。

戦後の木造学校建築として、また、実験・実習設備を備えた特別教室として、教育史的にも建築史的にも価値を有し、歴史的建造物として貴重です。

藤岡中学校の特別教室棟としての役目は、昭和 50



年に終え、昭和 56 年からは「藤岡町立民俗資料館」として開館し、平成 17 年には「豊田市藤岡民俗資料館」と名称を変更し存続しています。資料館では、木造学校の雰囲気を感じられ、藤岡地区ゆかりの考古や歴史、民俗に関する郷土資料がご覧いただけます。

### 藤岡民俗資料館のご案内

藤岡飯野町井ノ脇 401

見学無料

開館時間 9 時～17 時、

月休（祝日開館）





## 山本梅逸筆 蘭図天袋襖

平成 28 年度豊田市郷土資料館特別展「旧家の蔵から～足助の町を彩った商人文化～」(会期：平成 28 年 9 月 17 日～ 11 月 27 日)では、足助の旧家に伝わる生活道具や調度品を展示しました。中でも郷土資料館へ寄贈された屏風や掛軸の数々は、著名な絵師の手によるものもあり、足助の豪商の経済的豊かさや文化・芸術への関心の高さを示しています。

ここでは、「山本梅逸筆 蘭図天袋襖」についてご紹介します。

この資料は、天袋から外された状態で蔵に保管されていたので、どのような部屋の建具であったのかはわかりません。金地に緑色の春蘭(東洋ラン)が流れるような筆づかいで描かれています。

山本梅逸は、中林竹洞とともに、江戸時代後期の尾張を代表する南画家(南画は中国の南宗画の略で、日本では江戸中期以降に盛んになった。)で、狩野派や琳派などの様々な技法を用いた写実的で緻密な絵を多く残しています。天明 3 年(1783)に名古屋で生まれ、彫刻を生業としていた父親の影響で子どもの頃から絵に親しんだといえます。梅逸が活躍した江戸時代の終わり頃、書画会(茶屋などに同好者が集まり、書画の鑑賞やその場で書くのを見て、あとで酒宴などを催す会)が盛んになり、南画がよく描かれていました。

20 歳の頃、梅逸は、中林竹洞とともに京都で絵の修業をし、その後、諸国遊歴に出て、独自の画風を模索します。文化年間半ばには、江戸で名の知れた画家であった谷文晁たにぶんちやうと知り合って江戸に行き、開催した書画会は大成功だったといえます。50 歳の頃、再び京都に出て、多くの花鳥画を描きました。その後、幕末期に多くの傑作を描き、緻密さや荒々しさを特徴とする花鳥画や山水画を描くようになりました。晩年には画風が大きく変わり、色彩の少ない、叙情味ある絵が多くなります。そして、梅逸は名古屋に戻り、門人に温かく迎えられるとともに、御絵師格に取り立てられ、帯刀と拝謁も許されました。

梅逸の門人は数多くいますが、そのひとり京都の生川九春なるかわきゆうしゆん(生川鷗心おうしん)の描いた「花籠図」「花鳥図」「松月図」が足助の旧家に伝わり、郷土資料館へ寄贈されました。足助の旧家に伝わった屏風や掛軸について、今後も調査を続けていきたいと思います。

(山田佳美)

### 〈参考文献〉

- 名古屋市博物館『特別展 南画家 山本梅逸—華麗なる花鳥・山水の風雅—』名古屋市博物館 1998  
吉田 俊英『尾張の絵画史研究』清文堂出版株式会社 2008



落款

梅逸

某人 某華



## 江戸時代の城下町・寺部に残る

# 武家屋敷の長屋門

寺部町に武家屋敷の長屋門が2棟存在しているのをご存知でしょうか。この辺りは、徳川家康の家臣で、のちに家康の命で尾張徳川家の家臣となった渡辺半蔵守綱を初代とする渡辺家の城下町で、渡辺家の家臣であった松本家と遊佐家の長屋門が豊田市の文化財に指定されています。近年修理を行い、馬屋や番所を復元しました。

また、地区内には寺部城跡や渡辺家の菩提寺である守綱寺・隨應院など、江戸時代の城下町の雰囲気を感じられるスポットがあります。郷土資料館や交流館で、「寺部史跡マップ」も配布していますので、ぜひ散策してみてください。

### 豊田市指定文化財 旧松本家長屋門（豊田市寺部町2丁目39-15）

松本家は、渡辺家2代重綱の時に200石と家屋敷を与えられ、家臣となりました。初代は浅利兵左衛門といい、信州松本の出身であったことから松本を名乗りました。9代道高は、加茂一揆の時に一揆勢を説得したといわれ、また、寺部新町の火災で家を失った百姓を武士の長屋に住まわせるなどの功績から、家老に列せられました。また、道高は西洋式鉄砲を習うなど、幕末から明治維新の変革期に重要な役割を果たしました。

内部には、松本家に伝わる冑や旗などの資料や、寺部の歴史・史跡を紹介するパネルを展示しています。見学は土日10時～17時です。平日・祝日の見学については、豊田市郷土資料館までお問い合わせください。



上：馬屋  
左：番所(松本家に伝わる歴史資料を展示している)

### 豊田市指定文化財 遊佐家長屋門（豊田市寺部町2丁目9）

遊佐家は、初代佐香与八兵衛実清が渡辺家初代守綱に仕え、200石を賜りました。矢作川の堤防修理など、寺部の普請奉行を勤める家柄でした。6代の時に、苗字を「佐香」から「由佐」（後に遊佐）としますが、これは本来の名に戻したのだと伝えられています。明治以降、寺部村長、西加茂郡会議員などを務めました。

内部には、遊佐家の歴史や長屋門の修理について紹介するパネルを展示しています。見学は、門前に「長屋内公開中」の案内が掲げられている場合は可能です。



### ■利用案内■

開館時間 9:00～17:00  
休館日 毎週月曜日（祝祭日は開館）  
入館料 無料（特別展開催中は有料）  
交通案内 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分  
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分  
愛知環状線「新豊田市駅」より北へ 徒歩15分  
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ 徒歩5分  
駐車場 約20台

### ●豊田市郷土資料館だより No.97

平成29年1月25日発行  
編集・発行 豊田市郷土資料館  
〒471-0079 豊田市陣中町1-21  
TEL.0565-32-6561 FAX.0565-34-0095  
E-mail ● rekihaku@city.toyota.aichi.jp  
URL ● http://www.toyota-rekihaku.com  
FB ● http://facebook.com/toyotarekihaku   
※豊田市郷土資料館だよりは、HPでもご覧いただけます。